市立大町山岳博物館
７０年の歩み

市立 大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

市立大町山岳博物館
７０年の歩み

市立大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

初代博物館開館式

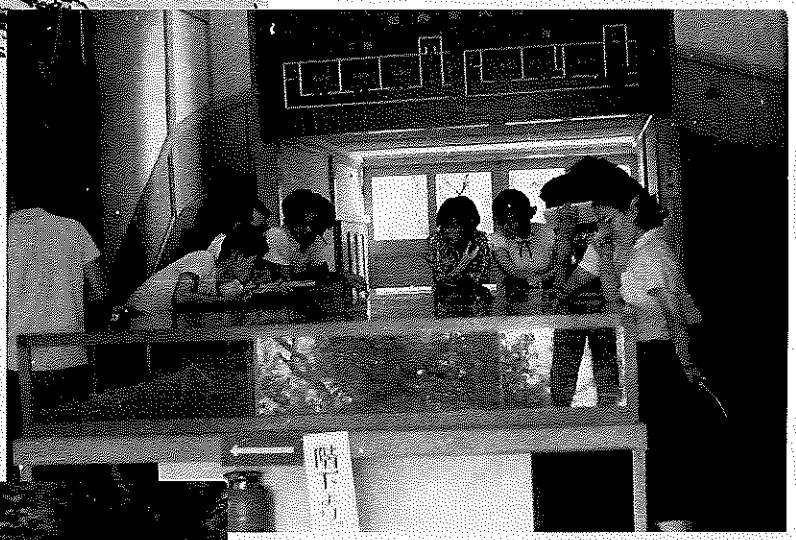
展示室風景

イヌワシの飼育開始

八方山研究登山

居谷里湿原でのボーリング調査

映画「白い山脈」の撮影

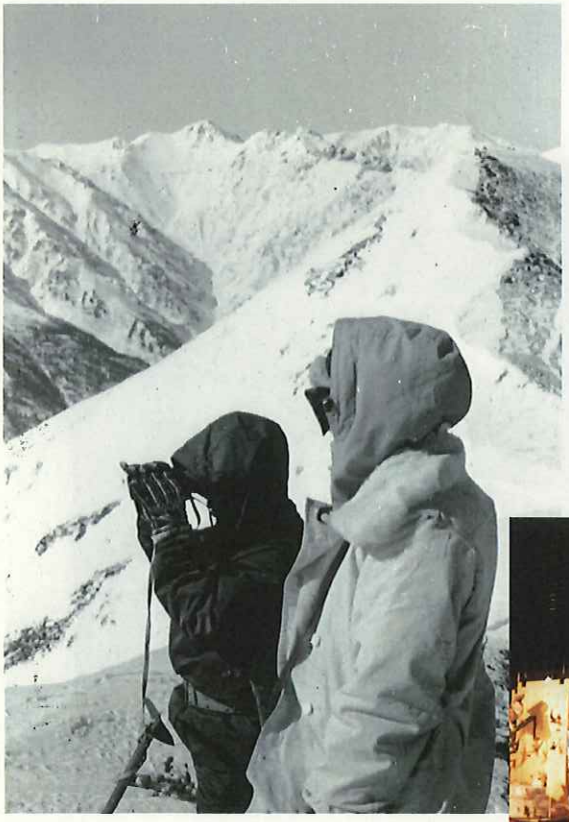


2代目博物館玄関正面の
北アルプスの模型

山の自然科学教室

針ノ木岳での植物調査

居谷里湿原における小鳥の声を聞く会



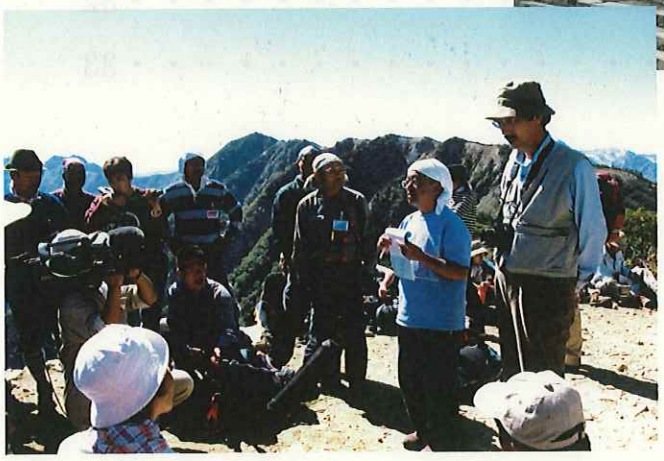
冬季のライチョウ調査

３代目博物館の開館当時の１階展示室

アルプスマーモットの入園

アルペン動物園開設25周年式典

3代目博物館外壁改修工事



50周年爺ヶ岳登山教室

市立大町山岳博物館７０年のあゆみ

もくじ

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
山岳文化都市宣言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
48年前の回想　―山岳博物館の思い出など―・・・・・・・・・・・・・・9
山岳博物館70年の歩み年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
平成23（2011）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
平成24（2012）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
平成25（2013）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
平成26（2014）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
平成27（2015）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
平成28（2016）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
平成29（2017）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
平成30（2018）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
令和元（2019）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
令和2年（2020）年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

人と自然の共生の拠点として、更なる飛躍を

令和３年 11 月１日、「岳都大町」を象徴する市立大町山岳博物館が、創立 70 周年を迎えました。この記念すべき節目を迎えるに当たり、市民の皆様はじめ、ご支援をいただきました多くの関係各位に深く感謝申し上げます。

大町市では、山岳博物館創設当初の理念と永年に亘る活動の成果を踏まえ、環境の世紀にふさわしい山岳文化の振興と新たな創造を目指し、人と自然が共生する「山岳文化都市」宣言しており、その人と自然の共生のための拠点施設が、山岳博物館であります。

創立 70 周年を契機として、あらためて創立時の「自然を知り、自然に親しむことにより、自然を守り育てる」の精神に立ち返り、時代に即した自然環境の保護保全と、地域文化の継承、創造を目標に、今後も調査研究や資料の収集保存、更には教育普及活動の充実に努め、生涯学習の拠点として、幅広い活動の展開に力を尽くしてまいります。

いま、世界を見渡しますと、各地に異常気象が頻発し、脱炭素社会が喫緊の課題となっております。効率性や成長のみを目指す中で、知らず切り捨てられた自然環境や人の健康などに改めて目を向ける時代となり、人も自然も豊かに活きる、持続可能な世界にするにはどうすればよいか、一人ひとりが自分ごとして考えなければなりません。北アルプスに象徴される美しく豊かな自然は、私たちの共有財産であり、将来に亘りこの地で暮していくために不可欠な地域資源です。そして、持続可能な地域社会を実現するために、私たちが果たす役割は極めて重要であり、そうした自覚を促し、先導していくのも、やはり山岳博物館の役割であります。人と自然の共生のための拠点として、今後、皆様との協働の下で更に飛躍していくことを期待しております。

結びに、これからも市民の皆様とともに歩み続ける地域の誇り「山博」として、いっそう親しまれ、愛される山岳博物館となりますよう、皆様のお力添えをいただきますことを心よりお願い申し上げます。

牛越 徹

市立大町山岳博物館創立７０周年にあたって

1947 年 5 月 3 日に発足した大町公民館の郷土部の青年たちは、郷土文化を興隆するためには、山岳博物館の設置が最重要課題であると構想し、その熱意と地域住民の支援によって、日本で最初の山岳博物館が 1951 年 11 月 1 日に誕生しました。この間、1952 年 8 月 20 日には博物館法に基づく登録博物館となり、大糸線が全通となった 1957 年 8 月 15 日と同日に 2 代目博物館が開館しました。動物園は初代博物館の庭に設置されたままでしたが、順次移転され、1967 年 3 月 21 日に移設が完了しました。そして、現在の 3 代目博物館の落成式が 1982 年 6 月 5 日に執り行われました。現在の博物館本館も来年には 40 周年を迎えることになります。

山岳博物館では、創立当初から山岳地域の動物・植物・地質・気象などの自然科学に関する調査研究や郷土の民俗・北アルプスの登山史に関する調査研究を精力的に実施してきました。それらの調査研究の成果は研究紀要等の論文として公表するとともに、収集した資料を展示に活かしてきました。また、付属園は開設当初から市民の皆様に親しんでいただいています。初期のオオハクチョウやイヌワシ、そして 1956 年 2 月 2 日にはカモシカの「岳子」が入園し、現在も 2 階の展示室で入館者を迎えています。爺ヶ岳でのライチョウの長期連続調査を端緒として、1963 年にはライチョウの域外飼育の研究が開始されました。現在では、ライチョウを飼育繁殖している施設として全国的に知られるようになっています。2019 年 3 月 15 日からは、ライチョウの一般公開を 15 年ぶりに再開しました。2021 年にはライチョウの自然繁殖にも成功しています。創立当時の青年たちや住民の皆様の熱い思いを忘れることなく、調査研究や飼育繁殖で得られた成果を、市民の皆様にわかりやすく伝えるための教育普及事業に、これからも力を尽くしてまいります。

折に触れ、山岳博物館のこれまでの活動や成果をまとめて記録することが大切であると肝に銘じており、今回の創立 70 周年に当たり、本誌「市立大町山岳博物館 70 周年の歩み」を編纂することとなりました。これまでの山岳博物館の歩みをご高覧いただきまして、引き続きご協力の程お願い申し上げます。

市立大町山岳博物館
館長　鈴木啓助

これまで市立大町山岳博物館の歩みは、40 周年記念に発行した『市立大町山岳博物館 40 年の歩み』（平成 3 年 11 月 1 日発行）、そして 60 周年記念に発行した『市立大町山岳博物館 60 年の歩み』（平成 23 年 11 月 1 日発行）があります。

今回発行致します『市立大町山岳博物館 70 年の歩み』（令和 3 年 11 月 28 日発行）におきましては、博物館の沿革部分について、「60 年の歩み」に掲載分以降の平成 23 年度以降の記録を記載致しました。

山岳文化都市宣言

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人とが共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

２１世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が込められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館５０周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる２１世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人とが共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

大町市

48年前の回想　―山岳博物館の思い出など―

大町市教育長　荒井今朝一

山岳博物館が７０周年を迎え、私も７０歳になりました。奇しくも大町市に奉職し、最初に勤務した職場も山岳博物館でした。ここでは、４８年前の博物館の様子と私の思い出を紹介させていただきます。

１９７４年に勤務した二代目博物館は職員６名で、辞令は「学芸員補」でした。入館者は７万人を超え、最初の仕事は、掃除と落ち葉の片づけでした。ケースを磨き、落ち葉を運んで燃やしました。今なら大問題ですが、この頃は当然でした。次に民具や山岳資料、出土品などの資料整理に取り組み、その整理カードは、今も大切に引き継がれています。

展示パネルや説明プレートも全て「手づくり」でした。木枠を発注し、糊を煮て紙を貼りパネルを製作し、テーマに合わせてイラストやレタリングをしました。こうした作業は、全て先輩の千葉彬司さんから教えていただきました。千葉さんはカモシカの生態が専門でしたが他の動物の飼育も担当され、『カモシカ日記』を通じて全国的に著名でした。あるとき「これは恩賜のタバコだよ。」といって菊の御紋章が入ったタバコをいただきました。何と宮中で、現上皇陛下に御進講をされてきたのです。とても明るく愉快な方で、時々、「学芸員じゃなくてザツゲイインだよな。」と笑っていた千葉さんも一昨年、故人になられました.

植物生態の専門は館長の故・平林国男さんでした。平林さんは、開設当時、高校を卒業して直ちに博物館に勤務し、その後一旦退職して大学を卒業後、再び博物館に勤務した努力家で、普段は無口でしたが、時々難しい課題を投げかけ、私たちを困惑させました。現在の３代目博物館建設の原資の一部は東京電力の寄付金が充てられたのですが、これは平林さんを中心とする博物館関係者が、高瀬渓谷再開発に伴う環境影響調査を行った功績に報いたものと伝え聞いております。

常勤の勤務職員の他にも羽田健三教授をはじめとする信州大学関係者や東京農大の中村武久教授、神奈川県立博物館の高橋秀男学芸員など多くの協力者がおり、山岳関係では「大町山の会」の皆さんから多大なご支援をいただいていました。

私は、２年目には中断していたライチョウ飼育を担当することになりました。６月の冷たい雨が降る中、爺ケ岳で営巣地を調査し、学生だった後の宮野館長と２人で採卵に向かいました。当日、文化庁と環境庁の許可が届くというので早朝に登山し、採卵して種池小屋まで来たところ「許可が来ないので返して来い。」との連絡。急な斜面を下り、ようやく返し終えて種池小屋に戻ったら「許可が下りたので採卵して来い。」との連絡が入りました。

再び小屋に着いたときは日も暮れ、下山する他ありません。卵が入った器を２人で交代しながら慎重に背負い、扇沢に着いたのは夜の１０時を過ぎでした。下界では「遭難したのでは。」と騒動だったようですが、「ニワトリじゃあるまいし、取って来い、返して来いって無理だよね。」と陰口を言ったものです。

数日後、６羽のヒナが孵化しました。ライチョウについて素人だった私を指導してくださったのは、別の職場に異動していた海川庄一さんでした。懇切丁寧に教えていただき、今も感謝しています。

孵化後、１羽のヒナが飛び出してしまい、ぐったりして歩くこともできません。飼料を口に運びながら懸命に看病した結果、何とか蘇生しましたが成長が遅く、足が不自由になってしまいました。また、予防ワクチンを接種したら一部が発病したこともありました。こうした経験から「体質は強いが、細菌の感受性は極めて高い」と知りました。

３年目に飼育下で母親が抱卵し、ヒナを育てる自然繁殖に初めて成功しました。実は、孵化後ヒナを抱こうとしなかったので、寝静まったお腹の下へヒナを入れた結果、抱くようになったのです。４年目は、３組のペアリングで多くのヒナを育てましたが、夏場になると急に死亡例が増加しました。暑さに耐えられないことが原因でしたが、冷房施設が少なく、どうすることもできませんでした。

当時、運転免許は私しかなく、カモシカの運搬も私の仕事でした。車両もなく、自分の車を使うようなこともありました。中には岳子という人懐こい白毛のカモシカもいました。岳子と千葉さん、私の１頭と２人で雑誌『山と渓谷』の表紙になったことがありました。各地の友人から連絡があり「岳子が主役だよ。」と返信しました。

木曽生というカモシカは不運でした。パンダのお返しに北京へ贈られる予定でしたが、柵を超えた侵入者に棒で突かれて片目を失明し、別のカモシカが贈られました。その姿には何かペーソスが漂っていました。

ニホンザルの１頭は私と「大の仲良し」で、雑草などを与えると檻の隅に来ては背中を向け、撫でてあげると喜んでいました。この習性はずっと残っていて、後々まで訪ねると背中を向けてくれました。

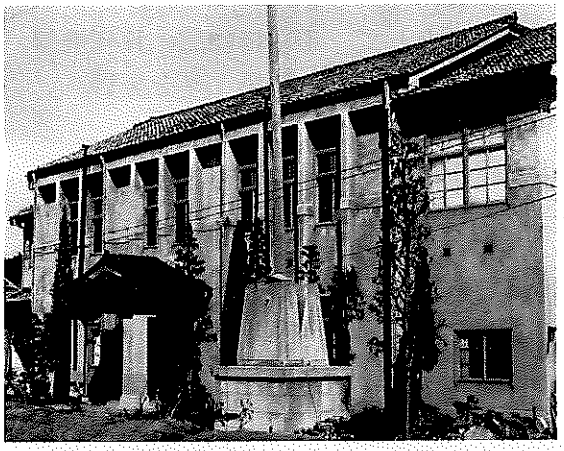
小鳥の声を聞く会や自然観察会など子どもたちとの交流、館の将来について議論したこと、友の会を再開したこと等々、４年に満たない日々でしたが、ここで学んだ多くの経験は、その後の人生に大きな財産になりました。そして今、「古希」を迎えた博物館の前に立つ時、「山岳文化都市」の象徴として原点に立ち返り、フェニックスのように大きく羽ばたいて欲しいと願うばかりです。

山岳博物館70年の歩み年表

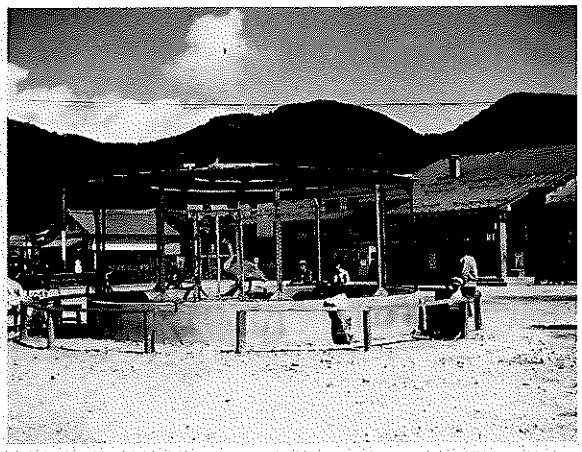
昭和22年５月３日、新しい日本国憲法施行の日、町立大町図書館は公民館として発足した。当時、青年団を主体とした若者たちは、終戦直後の混沌とした社会情勢の中で、公民館建設に新しい夢を託して立ち上がりつつあった。この日も一志茂樹氏（当時松本市立博物館長・大町出身・故人）は、「新しい地方文化向上のために、郷土の特殊性を活かし、私たちは北アルプスの大自然をもう一度見直さなければならない」と述べ、青年たちをいたく感嘆させた。

この10月に発表された青年たちの公民館運営の構想の中に公民館郷土部の設置があった。この頃から青年たちは、郷土文化を興隆するためには、街の立地条件から山岳博物館の設置こそ最重要課題であると結論し、それが郷土部の掲げた最高の目標であった。郷土部の青年たちはこの構想に基づいて具体的な行動に移った。それから５年後の昭和26年11月１日、青年たちの熱意は日本で最初の山岳博物館を誕生させたのであった。

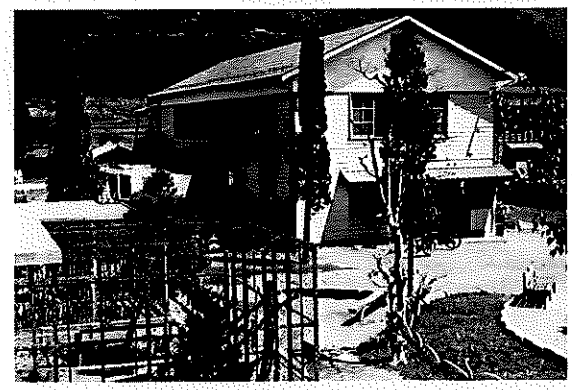
●1947年（昭和22年）10月	大町公民館に青年団の若者を中心として郷土部が誕生し、郷土文化興隆の拠点として「山岳博物館」の設置を目標に掲げ、設立運動が起こる
●1949年（昭和24年）1月	保護されたオオハクチョウを駅前の水禽舎で飼育。博物館の必要性がさらに叫ばれ、後に水禽舎は博物館の付属施設となる
●1951年（昭和26年）11月	北アルプスの麓、大町市に日本初の山岳博物館が開館（初代博物館）
●1952年（昭和27年）8月	博物館法に基づく博物館として登録
●1952年（昭和27年）11月	苑地整備としてパーゴラガーデンの建設、古代スキーの模型、スキー解説パネル、山岳地模型が制作される
●1953年（昭和28年）7月	博物館研究会が発足
●1953年（昭和28年）8月	イヌワシの１羽が入園
●1953年（昭和28年）11月	マナスル登山の遠征隊員 加藤泰安氏による「マナスル登山講演会」を開催
●1954年（昭和29年）4月	大町市内および北安曇郡下の小・中学校を主体とした博物館研究会から、月刊機関紙「大町山岳博物館研究会報」を発行



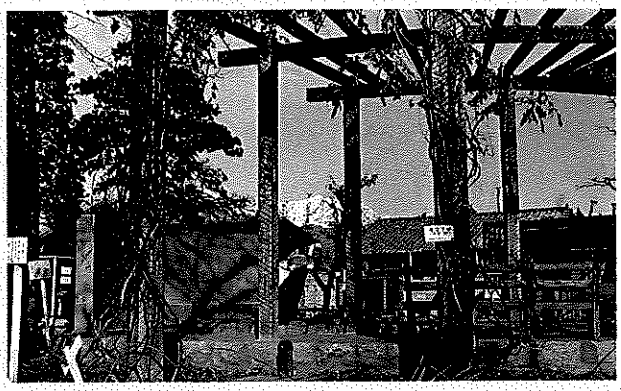
大町公民館



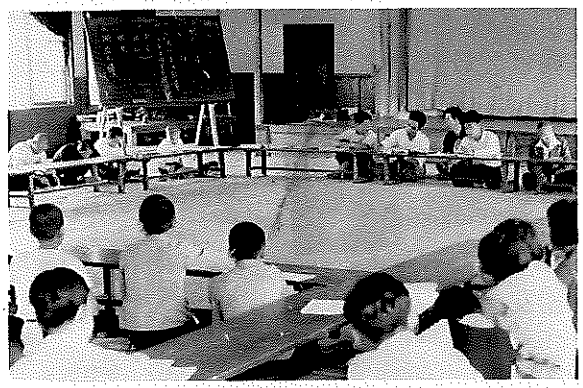
駅前の水禽舎



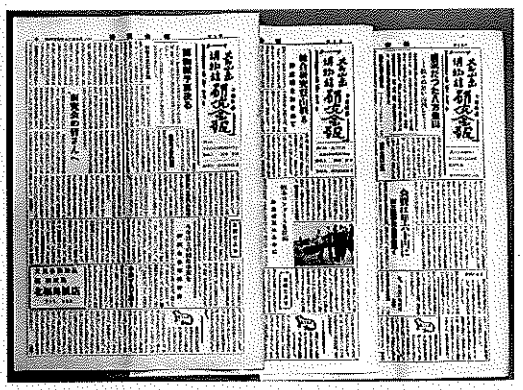
初代博物館



パーゴラガーデン



博物館研究総会



「研究研究会報」の発行

八方山研究登山

●1956年（昭和31年）2月　広報および教育普及活動の手段として、山岳博物館の月刊機関紙「やまと博物館」（現在の「山と博物館」）第1号を発行

●1956年（昭和31年）2月　ニホンカモシカを初めて保護・飼育
（一般公募により岳子と命名され21年間飼育）

●1956年（昭和31年）4月　北アルプス一帯を野外博物館として開設することを目的とした、５カ年の基礎調査の予備調査として居谷里湿原総合学術調査を開始

●1956年（昭和31年）4月　動物記録映画「白い山脈」の制作協力として、撮影案内と指導を行う

●1956年（昭和31年）5月　関西電力による黒部渓谷のダム建設のための雨量調査に協力

●1957年（昭和32年）7月　東京教育大学の「博物館実習」を実施

●1957年（昭和32年）7月　山の自然科学教室を実施

●1957年（昭和32年）8月　現大町公園へ大町南高等学校校舎を移築
（２代目博物館として開館）

●1958年（昭和33年）4月　針ノ木自然公園開園に向けて針ノ木調査を実施

●1958年（昭和33年）7月　当館初の講師派遣として、奈良帝塚山学園の「林間学校」へ自然についての指導を実施

●1959年（昭和34年）　博物館研究会が「博物館友の会」と改称

●1960年（昭和35年）8月　日本鳥学会と林野庁が主体となり実施した、白馬岳から富士山へのライチョウ移植に協力

●1960年（昭和35年）9月　コマクサの低地栽培・研究を実施

●1961年（昭和36年）3月　皇太子殿下（現上皇陛下）御巡幸
館内の展示をはじめ、ニホンカモシカの「岳子」を親しくご覧になられる

●1961年（昭和36年）　木崎湖湖畔に「白鳥の池」を作り、皇居外苑保存協会から２羽のコブハクチョウを移入し、飼育を開始

ニホンカモシカ（岳子）

雨量計調査

東京教育大学「博物館実習」

２代目博物館

針ノ木岳での植物調査

富士山へのライチョウ放鳥

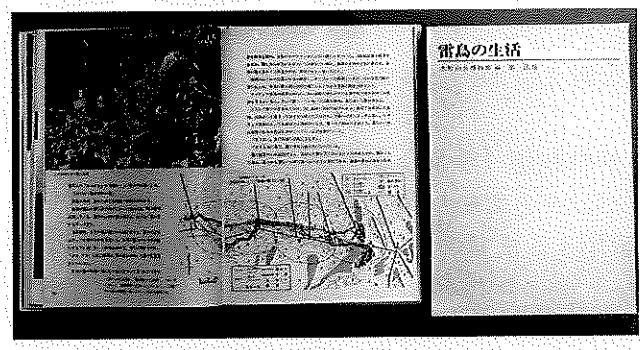
「岳子」にエサを
与える皇太子殿下

春のライチョウ調査

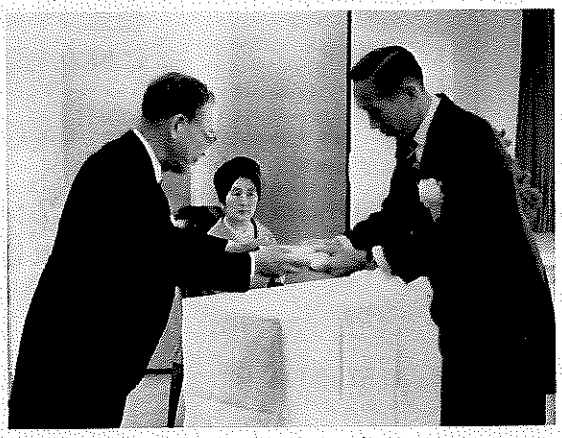
●1961年（昭和36年）5月	爺ヶ岳におけるライチョウの調査の実施
●1961年（昭和36年）6月	高松宮宣仁親王殿下、雍仁親王妃勢津子妃殿下御成り
●1962年（昭和37年）8月	第4回国立公園大会にて長野県知事表彰を受ける
●1963年（昭和38年）3月	前年度に実施できなかった冬季のライチョウ調査を爺ヶ岳おいて実施
●1963年（昭和38年）8月	第5回国立公園大会にて厚生大臣表彰を受ける
●1963年（昭和38年）9月	山岳でのライチョウ研究と並行して、低地での飼育研究を開始（～2004（平成16）年2月）
●1964年（昭和39年）7月	「雷鳥の生活」を刊行
●1964年（昭和39年）7月	爺ヶ岳周辺にて移動禽舎によりニホンライチョウ親子を飼育
●1965年（昭和40年）5月	ライチョウの生態解明の研究に対し、日本鳥学会から表彰を受ける
●1965年（昭和40年）6月	秩父宮記念学術賞を受賞
●1965年（昭和40年）6月	保護したニホンカモシカの幼獣の人工哺育に成功（大助：14年間飼育）
●1966年（昭和41年）4月	映画「特別天然記念物ライチョウ」の撮影協力を実施 当作品は翌年のアジア映画祭においてグランプリを受賞
●1968年（昭和43年）	低地栽培実験によりコマクサの繁殖に成功
●1969年（昭和44年）5月	飼育下におけるニホンライチョウの自然繁殖に、日本で初めて成功
●1970年（昭和45年）5月	飼育下におけるニホンカモシカの自然繁殖に成功 国内カモシカ繁殖例の第1号として認定される
●1972年（昭和47年）11月	「北アルプス博物誌」を刊行（創立20周年記念事業）

ライチョウの低地飼育の開始

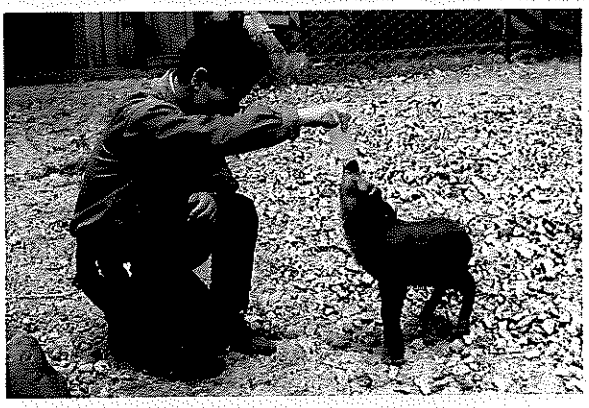
移動禽舎によるライチョウの飼育



雷鳥の生活の刊行



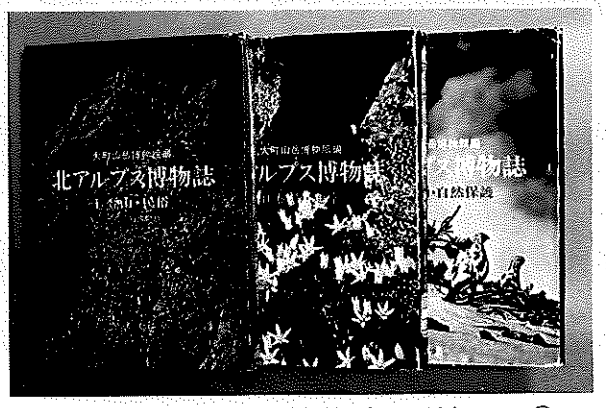
秩父宮記念学術賞授賞式



ニホンカモシカ人工哺育第1号の「大助」

コマクサの低地栽培実験

ニホンカモシカの初繁殖



北アルプス博物誌の刊行

●1973年（昭和48年）3月	日中国交正常化を記念して贈られたジャイアントパンダの返礼として、翌年中華人民共和国へ山岳博物館で飼育されたニホンカモシカが贈呈される
●1975年（昭和50年）	国庫、県費補助により空調設備を備えたライチョウ舎の建設を行い、ライチョウの飼育を開始
●1975年（昭和50年）9月	陳楚駐日大使夫妻がご来館
●1976年（昭和51年）	文化庁から日本自然保護協会が委託されたカモシカの生態解明調査の事業の一環として、テレメーター装着具および電波実験に協力
●1948年（昭和53年）8月	博物館友の会が「大町山岳博物館友の会」として再発足
●1981年（昭和56年）4月	ジャイアントパンダの剥製「ランラン」の一般公開が山岳博物館からはじまる「パンダとカモシカ」展の開催期間中の入館者は4月22日から5月5日までの期間で3万人を超える
●1982年（昭和57年）5月	現在の場所に3代目博物館が新館オープン
●1983年（昭和58年）	大町市内の博物館で構成される「大町博物館連絡会」の発足し、初代幹事館となる
●1984年（昭和60年）2月	オーストリアのワイイヤーブルグ宮殿において、アルペン動物園と友好提携協定を締結
●1985年（昭和60年）2月	友好提携を記念してニホンカモシカとアルプスマーモットの動物交換が行われる また、翌年の２月にはヨーロッパオオライチョウを受け入れる
●1987年（昭和62年）9月	インスブルック市アルペン動物園の開設２５周年記念行事に参加
●1988年（昭和62年）7月	日本・中国・ネパールの３国合同登山隊のエベレスト登頂を記念して、特別展「ヒマラヤ展」を開催
●1989年（平成元年）6月	日本動物園水族館協会繁殖賞を受賞 (ヨーロッパオオライチョウ 自然繁殖)
●1990年（平成2年）3月	アルペン動物園から、シャモアが贈呈される
●1990年（平成2年）	「町づくり特別対策事業」の一環として、付属園の整備工事が始まる

ニホンカモシカの歓送会

友の会の再発足

「ランラン」の剥製展示

３代目博物館の
オープン

友好提携調印

ヨーロッパオオライチョウの歓迎式

ヒマラヤ展

シャモアの歓迎会

●1991年（平成3年）10月	秋篠宮文仁親王殿下御成り
●1991年（平成3年）10月	アルペン動物園から、シベリアオオヤマネコが贈呈される
●1991年（平成3年）11月	世界最高峰エベレストの初登頂者エドモンド・ヒラリー卿が来館
●1992年（平成4年）2月	創立40周年記念事業として「ライチョウ 生活と飼育への挑戦」、「カモシカ 氷河期を生きた動物」を発刊
●1992年（平成4年）9月	紀宮清子内親王殿下（当時）御成り
●1992年（平成4年）9月	皇太子徳仁親王殿下（現 天皇陛下）御行啓
●1994年（平成6年）2月	前年より編集を進めてきた「博物館総合案内書」が、日本生命財団より3,000部贈呈される
●1994年（平成6年）7月	オーストリアのシェーンブルン動物園へカモシカを贈呈
●1994年（平成6年）	ライチョウ保護事業として爺ヶ岳等の山小屋とテント場に注意喚起の看板や標識、ロープを設置
●1994年（平成6年）7月	友の会の営業により「喫茶売店こまくさ」がオープン
●1999年（平成11年）12月	博物館公式Ｗｅｂサイト開設
●2000年（平成12年）	日本動物園水族館協会繁殖賞を受賞 (ニホンライチョウ 自然繁殖及び人工繁殖)
●2000年（平成12年）8月	大町市の呼びかけにより「ライチョウ会議」が発足
●2001年（平成13年）3月	山岳博物館の創立５０周年を機に、大町市が「山岳文化都市宣言」を行う
●2001年（平成13年）10月	創立５０周年記念シンポジウムを大町文化会館において開催 関連イベントとして、「岩崎元郎・みなみらんぼう　アウトドアズトークショー」、「爺ヶ岳登山―岩崎元郎・みなみらんぼうと登る爺ヶ岳登山教室―」を開催
●2001年（平成13年）8月	信州大学と合同で、白山にてライチョウ生息可能地域調査を実施
●2004年（平成16年）	２階展示室の展示改修を実施
●2004年（平成16年）2月	飼育下のオスのニホンライチョウの死亡により、国内唯一の飼育が途絶える

秋篠宮文仁親王殿下

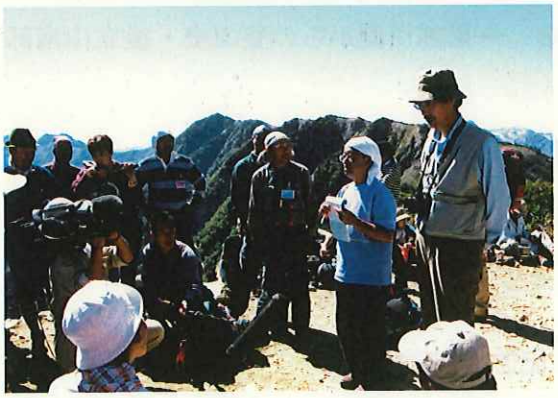
エドモンド・ヒラリー卿

紀宮清子内親王殿下

皇太子徳仁親王殿下

喫茶売店こまくさ

第１回ライチョウ会議



爺ヶ岳登山ー岩崎元郎・みなみらんぼうと
登る爺ヶ岳教室ー

改修後の２階展示室

●2004年（平成16年）	環境省委託事業によるニホンライチョウの近似種スバールバルライチョウの飼育施設視察・資料収集の実施
●2004年（平成16年）9月	山岳博物館ライチョウ保護事業検討委員会が発足
●2005年（平成17年）7月	大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会が発足
●2005年（平成17年）7月	信州大学山岳科学総合研究所（当時）と研究協力協定を締結
●2007年（平成19年）6月	爺ヶ岳において長野県環境保全研究所と共同でニホンライチョウの生息調査を実施
●2008年（平成20年）6月	餓鬼岳においてニホンライチョウの生息調査を大町市民らと実施
●2010年（平成22年）3月	北アルプス登山史資料１ ―鹿島槍ヶ岳登山史―を発行
●2011年（平成23年）11月	創立60周年を迎える
●2012年（平成24年）3月	北アルプス登山史資料２ ―白馬岳周辺登山史―を発行
●2014年（平成26年）3月	長野県環境保全研究所と提携・協力協定を締結
●2014年（平成26年）3月	全館リニューアルオープン（創立60周年記念事業）
●2014年（平成26年）3月	大町山岳博物館友の会の支援により公式Webサイトをリニューアル
●2014年（平成26～28年）	山岳博物館が参加する鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）学術調査による調査実施
●2015年（平成27年）6月	スバールバルライチョウの飼育開始
●2016年（平成28年）3月	市立大町山岳博物館　研究紀要を創刊
●2016年（平成28年）6月	ニホンライチョウの飼育再開
●2017年（平成29年）3月	北アルプス登山史資料３　―黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史―を発行
●2019年（平成31年）3月	ニホンライチョウの公開開始
●2019年（平成31年）3月	公式SNSを開始
●2021年（令和3年）7月	23年ぶりにニホンライチョウの自然繁殖に成功
●2021年（令和3年）11月	創立70周年記念式典・記念講演会を開催

大町市ライチョウ保護事業計画策定委員会

研究協力協定締結式

北アルプス登山史 1

60 周年記念式典

スバールバルライチョウ

研究紀要創刊号

ニホンライチョウの自然育雛

山岳博物館　沿革

平成２３（２０１１）年度

○平成２３年度は、創立６０周年を記念した事業を行なった。１１月３日に JA ホール アプロードを会場に記念式典を催行し、記念講演会では東京学芸大学の君塚仁彦教授に「大町山岳博物館の過去・現在・未来」と題して講演を開催した。式典に先立ち山岳博物館創立６０周年記念番組「北アルプスの自然と文化を見つめて　そして未来へ～大町山岳博物館の６０年～」を SBC 信越放送局により放送し、山岳博物館の活動について多くの方にご覧いただくことができた。
また、平成２２年度中に山岳博物館に寄贈された絵画を速報展として展示を開催した。

創立６０周年式典風景

○平成２３年度企画展は、「山岳（やま）を科学する２０１１　その最前線」と題し信州大学と連携し最新の研究成果を皆さんにご覧いただいた。

また市民と学芸員との協働による湿地植物の生活史研究グループにより、企画展「くさばなの一生　湿原で見られる植物の生活史　～その営みとなぞにせまる！～」を開催、展示にあたって植物のボタニカルアート（細密画）を展示し好評を博した。「第２回山岳公募写真展　北アルプス　～美の誕生～」は、大町市の「山岳文化都市宣言」１０周年に合わせ記念した企画展であり、公募により寄せられた作品の中から選りすぐりの作品を展示した。

○平成２３年は、長野県山岳協会創立５０周年の年に当たり、同協会から貴重な山岳図書と多額なご寄付をいただき、「山岳図書資料館」の建設を行った。併せて来年度の開館のため、図書整理員を雇用し、図書整理作業を実施した。

山岳図書資料館

○博物館の使命及び具体的な事業を計画するにあたり、パブリックコメントを求めるため、市民の方々に意見や提言をいただく機会を設け、「山岳博物館のこれからを考える会」をテーマに４回にわたり懇談会を開催し、最終的な「使命書」の作成に結びつけることができた。

○山岳博物館展示改修に係る専門委員会の開催のため、展示改修専門委員（９名）を委嘱し専門家からのご意見を聞く検討会を３回実施した。また公募型プロポーザル方式による展示改修実施計画業者の選定を実施した。

○東宝株式会社・東宝映画株式会社のご協力により、映画「岳」のPRのため、ロケの撮影風景などの写真や映画で使用した小道具などの展示を行なった。映画「岳」は、警察署の設定で博物館が使用された。2階レクチャースペースを利用し展示を行い、映画への関心の高さから県内外から展示の見学のために来館される方が多く見られた。

映画撮影風景

平成２４（２０１２）年度

○本年４月２０日に山岳図書資料館が開館。この施設は前年の平成２３年に長野県山岳協会が創立５０周年を、また山岳博物館が創立６０周年を迎えるにあたり、両者の記念事業として建設されたものである。開館当初の収蔵図書は約１６，８００点に及び、初年度は１６３人の閲覧があった。
その後も各方面から山岳図書寄贈の申し出があり、年度末には収蔵図書が約２７，７００点となった。貴重な山岳図書の散逸を防ぐという目的の為、引き続き今後も収集保管に努め、また多くの方にご利用いただくよう広報に努めていきたい。

○本年度の企画展は、スイス政府観光局と博物館との共同企画展として、「スイス山岳観光の黄金期と日本人ーその魅力と文化を伝えた人々ー」を開催した。この企画展はユングフラウ鉄道全線開通１００周年にあわせ開催されたものである。また、信州大学山岳科学総合研究所と博物館との共同企画展として、「大地はなぞだらけフォッサマグナ・北アルプスのおいたちのなぞ」を開催した。

○春には友の会と共同で「小鳥の声を聞く会」を開催し、冬には親子探鳥会（冬鳥の観察会）を開催。こうした観察会は平成１５年以降毎年実施し、今回１０回目を数え、木崎湖周辺における野鳥の生息動向に関する調査記録を蓄積することができた。

○博物館独自の子供向け学習会として開催している「さんぱくこども夏期だいがく」も定着し、多くの子供たちが夏休み期間を利用し、博物館で自然科学の楽しさを学ぶ機会が増えた。

○学校との連携・融合事業は当館にとり、地域に根差した博物館としての役割を象徴する事業であり、特に学校との連携授業は昨年度までの大町南小学校との試行的なモデル事業を本格実施し、発展させ大町市内６校の小学校に投げかけ５校まで拡大し、博物館を会場に理科の授業を行った。

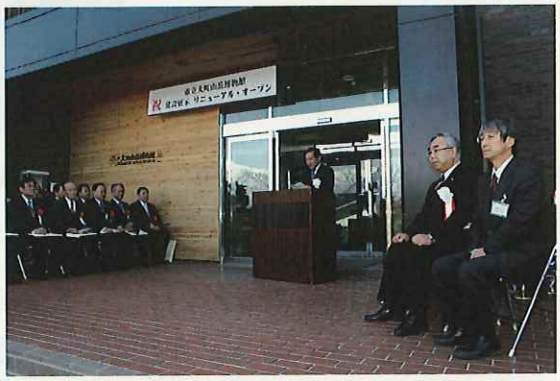
○９月２０日～２５日にかけて、大町市長はじめ副市長、博物館館長、秘書係長が、オーストリアのアルペン動物園創立５０周年記念式典へ参列した。

平成２５（２０１３）年度

○本年度、平成２４年の耐震診断に基づき、２階・３階の柱の補強、３階の開口閉塞補強、１階トイレのコンクリートブロック壁の転倒防止等の処置を講じる耐震補強工事を実施した。耐震工事に併せて博物館のユニバーサルデザイン化を進め、駐車場から博物館玄関までの階段の手すりを設置し、玄関の自動ドア化、授乳室の設置、トイレの段差解消や設備の更新を行なった。

前年度において荒山設計事務所により耐震・改修工事の設計を実施し、それに基づき本年度、耐震・改修工事を実施。施工業者は入札により㈱岡澤組となり、請負額は４３，０８１，５００円で、工期は平成２５年１０月１０日～平成２６年３月２６日までの間実施。工事期間中は、博物館は臨時休館（平成２５年１１月３日から平成２６年３月２８日）。

○本年度、㈱乃村工藝社（東京都港区）と委託契約を結び展示改修事業を行う。新たな展示テーマを「北アルプスの自然と人」とし、３階を「展望ラウンジ」、２階を「山の成り立ち」、「山と生きもの」、１階を「山と人」をテーマとするゾーンとして、後立山連峰を中心とした大地の成り立ちや、そこに生息する植物や動物の生活、山と人の関わりを学べる展示を通じて、「自然と人とが共生する山岳文化を」をメッセージとして伝える。展示改修に併せて博物館公式ホームページやロゴなどを刷新し、リニューアルオープンの日から運用を開始する。



展示改修に係る展示改修施工業務の総経費は６８，６７０，０００円であった。

リニューアルオープン式典は、平成２６年３月２９日に開催。式典参列者は約１３０名。博物館は安全で快適な施設となり、展示も全館にわたり充実した内容となった。

○本年度の企画展は、くろよん５０周年記念事業のひとつとして特別展「黒部ダム・関電トンネル写真展」を開催した。

○昨年まで付属園で展開した写生大会、動物観察ツアー、スタンプラリーなどを一連の催事として、「付属園まつり」という名称に変更し、ゴールデンウィーク期間中に実施した。

○本年度の大きな特徴として、友の会との共同事業に取り組んだことを挙げることができる学芸員と友の会役員が協働で企画し、準備を行い、「古道　塩の道を歩くー佐野坂峠越え白馬から大町へー」、「親子でライチョウ観察ツアー」、「糸魚川世界ジオパーク探検ツアー」「さんぱく座談会ーもうすぐリニューアルオープン！地域の博物館・山博について語り合いませんか？ー」の４つの事業を行なった。

○平成２６年３月２５日には、長野県環境保全研究所と連携・協力に関する協定を締結。締結の意義は、長野県を特徴づける山岳域の自然とその環境保全に関わる諸課題の解明や解決に力を合わせて取り組み、学術振興や自然環境の保全、そして地域の発展に重要な役割を果たすことを目標とした。

平成２６（２０１４）年度

○本年度の事業で特記すべきは、鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓の調査が開始されたことが挙げられる。カクネ里雪渓は半世紀前より氷河の可能性が指摘されていたことから、信州大学、長野県環境保全研究所、立山カルデラ砂防博物館と山岳博物館が中心となって学術調査団を組織し、氷体の流動調査などを計画した。しかし現地までのアプローチのルート工作のための調査を行った結果、雪渓の残雪状況が不安定であり、調査団員が安全に調査地まで到達することが困難と判断し、本年度の調査継続を断念し、翌年度にヘリコプターを使用しての現地移送を視野に計画の練り直しを行った。

○本年度よりライチョウの生息域外保全事業が本格的に開始された。環境省が本年１１月に発表した「ライチョウ生息域外保全実施計画」によると、平成２７年から日本産のライチョウ飼育を開始することとなり、先ずは恩賜上野動物園と富山市ファミリーパークが創始個体の育成を行い、山岳博物館は新たにライチョウ飼育舎を建設し、将来的に日本産のライチョウ飼育を視野に入れる前段階として、近縁種のスバールバルライチョウ飼育を開始する予定であったが、ライチョウ舎の設計に遅れが生じ、ライチョウ舎の竣工が翌年度にずれ込むこととなった。

○資料の収集保管にあたって、市内の昆虫コレクターからチョウやトンボの展翅標本の寄贈があった。今後は保管と管理に努めるとともに教育普及に生かし活用していきたい。このほか山岳図書資料についても順次ホームページに公開する準備を進めている。

○本年度の企画展は、「日本山岳画協会　大町展」を７月から１１月までロングランで開催した。展示は２部構成とし、作品を２回に分け、より多くの作品を来館者の皆様にご覧いただいた。

平成２７（２０１５）年度

○鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）調査では、度重なる天候不順により調査が困難を極め、本年度は調査を氷体の流動調査に絞って実施し、氷河認定に足る十分な移動量が確認された。地質及び気象等の調査については翌年度に実施されることになった。
また氷河に関する知識を深め、調査の意義を理解していただくためのシンポジウム「日本と氷河」が本年５月１６日に開催された。

○本年度、ライチョウ飼育舎３棟を建設、近縁種のスバールバルライチョウを富山市ファミリーパークからオス３羽をお借りするとともに、同パークと石川動物園から合計２７個の卵をいただき、将来のニホンライチョウ導入を視野に入れた取り組みが始まった。
年度末の時点でスバールバルライチョウ７羽（オス４羽・メス３羽）の飼育実績を積み、来年度以降のニホンライチョウ飼育へ大きな弾みとなった年であった。

○本年度の企画展は、「山博にライチョウがやってくる」、「山岳風景画の世界」「大北・安曇野の自然に蝶が舞う」を開催した。

○本年度より山岳博物館研究紀要が発刊され、平成２８年３月に創刊号が発行された。

平成２８（２０１６）年度

○昨年度、恩賜上野動物園と富山市ファミリーパークがニホンライチョウの創始個体（卵）を導入し、飼育を開始したのに引き続き、本年度から山岳博物館も加わり、乗鞍岳よりニホンライチョウの創始個体（卵）４卵を導入、ニホンライチョウの飼育事業を再開した。人工繁殖の結果、４羽が孵化・生育し、翌年度の繁殖に向けて準備を進める。

しかし１２月１０日にライチョウ舎中央棟においてニホンライチョウの逸失事故を起こしてしまった。逸失したのはオス・メス１羽であり、懸命な捜索によりオス１羽は当日保護することができたが、その後メス１羽については発見するに至っていない。

また本年度は長野県と連携を図りながら、ライチョウサミット「第１７回ライチョウ会議長野大会」を２日間にわたり大町市文化会館において開催した。大会ではライチョウの保護を目的に、生息地を抱える全国の関係者が集い、一般参加者を集いシンポジウムなどの催しも行われた。関連事業を含め約７４０人の参加があり、ライチョウ保護へ機運を高めることができた。

○平成２６年度から学術調査団を組織し、鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）調査を本年度も実施した。度重なる天候不順の為、調査は困難を極めたが、本年度は気象データーの取得や雪渓消長のデータ蓄積などを実施し、地質・地形調査を残し全て調査は終了した。学術調査団は本年度をもって解散となり、今後は調査結果をまとめ、学術論文の形で成果を取りまとめる。

○本年度の企画展は、「鹿島槍ヶ岳カクネ里氷河への道のり」、「雷鳥～四季を纏う神の鳥～髙橋広平写真展」を開催した。

平成２９（２０１７）年度

○前年度、山岳博物館で孵化したニホンライチョウ４羽のうち（１羽逸失）の中から、１ツガイによる人工繁殖を実施した結果、４卵が孵化し、そのうちの２羽が順調に成長した。その後、上野動物園から受け入れたものを加え、年度末には成鳥３羽、幼鳥３羽の６羽となった。

なお、付属園整備事業ではニホンライチョウの繁殖事業による個体数増への対応のため、国庫補助事業（地方創生拠点整備事業）を活用し、新たにライチョウ舎１棟を建設した。

○昨年度で鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）学術調査団が解散したことにより、本年度はこれまでの調査で残された地形・地質調査を信州大学と山岳博物館の２者により実施し、すべての調査が終了した。これらの成果については年度末に発行された当館発行の「研究紀要　第２号」に掲載されている。また平成３０年１月には日本地理学会学会誌「地理学評論」に論文「飛騨山脈で新たに発見された現存氷河とその特性」が掲載され、カクネ里雪渓が正式に氷河として認定された。

○企画展では、北アルプス国際芸術祭パートナーシップ事業として、芸術祭の時期に併せて特別展「山と美術ー山岳風景画とウッドシャフトピッケルー」を開催した。その他に、大町登山案内人組合創立１００周年記念事業実行委員会と山岳博物館が共同し、企画展「北アルプスの百年　百瀬慎太郎と登山案内人たち」を開催した。

○企画展以外の教育普及では、博物館友の会との共催による講演会「セブンサミッター　山田淳氏講演会」や氷河調査の成果を発表した「鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓（氷河）学術調査団は語る　秘境カクネ里とは」、「カクネ里雪渓（氷河）見学会」などを実施した。

平成３０（２０１８）年度

○本年度の企画展は、「北アルプス誕生　激動の５００万年史」を開催。これに関連して企画展のオープニングには「ミュージアムトーク」、夏休みの子供向けに「親子の化石教室信州が海だった頃」、北アルプス地質見学登山「爺ヶ岳にカルデラがあった頃」と題し現地において岩石の断面を観察しながら、北アルプスの成り立ちを学んだ。また信州大学特任教授の原山智氏による「地質探偵ハラヤマ先生北アルプス研究の最前線を語る」、そして北アルプスについての日頃から不思議に思っていることを質問し合う「秋のティータイム「北アルプスの不思議」など年間を通して開催した。

○６月９日、サン・アルプス大町を会場としてシンポジウム＆ディスカッション「カクネ里氷河の魅力と岳のまち大町の未来」を開催した。当シンポジウムは大町市産業観光部と連携を図り、氷河に関する学術的な価値を知っていただくだけではなく、将来の山岳観光の方向性や「氷河」を将来の街づくりにどう活かしていけばいいのか、議論を通じて広く市民の方々に喚起する機会となった。参加者１３０人。

○ニホンライチョウの飼育事業については、本年度１組のツガイで繁殖を行なったが、産卵が見られなかった。来年度の繁殖に向けて、本年度の経験を活かし準備を進めていくこととなった。

また年度末の３月１５日、ニホンライチョウの一般公開を記念して、「ライチョウ公開記念特別講演会並びに公開されたライチョウのガイドを実施した。

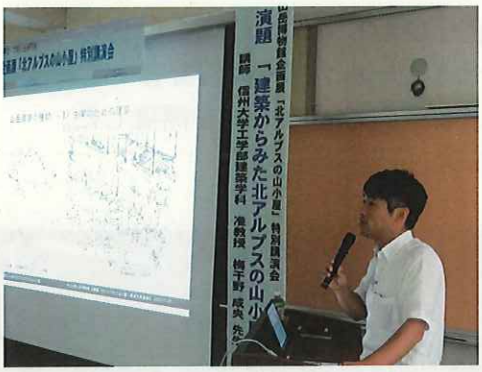
本年１０月１９日～２２日には新潟県妙高市において「第１８回ライチョウ会議新潟妙高大会」が開催され、３日間で約1,３００名の方が来場された。

○大町山岳博物館友の会が昭和５３年８月に再出発してから本年で創立４０周年を迎え、４月１５日には総会・講演会を開催するとともに、牛越市長はじめ歴代の友の会の役員の方々をお招きして「創立４０周年記念事業」を開催した。

○本年度より山岳博物館季刊誌「山と博物館」が機関誌となり、併せて全戸配布を行う。

令和１（２０１９）年度

○本年度企画展としては、「北アルプスの山小屋」展を開催。関連事業として、山小屋を建築史の観点から調査を行っている信州大学の梅干野（ほやの）先生による「建築からみた北アルプスの山小屋」と題する講演会を開催。また上高地徳本峠小屋など、かつての古い形式を残す山小屋の見学会を行った。



○ニホンライチョウの人工繁殖の取り組みによりは１ツガイから７羽の雛が誕生し、３羽を成鳥まで生育させることができた。

○博物館友の会との共催事業では、講演会「チベット・シュエラプカンリ初登頂と高所順応」を開催。

○本年度より、ホームページのほかＳＮＳを用いた情報発信を開始。Facebook の運用を行う。

○付属園には、市民や観光客の皆さんに長年にわたり親しまれてきたが、一方で施設も老朽化し、安全防止上のフェンスも無いなど改善点が多々指摘されている。
こうした状況から、付属園整備に関わる整備構想案の策定を取りまとめ、博物館創立７０周年の記念事業の一環として位置付け、準備を進めている。

令和２（２０２０）年度

○本年度の企画展は、「日本山岳画協会　大町展」が４月から予定されていたが、新型コロナウイルス感染拡大により全国に緊急事態宣言が発せられ、博物館も４月１９日から６月１日まで臨時休館を行う。６月２日より「日本山岳画協会　大町展」を開催するが、すべての予定していた関連行事は中止となる。
７月からは企画展「博物学と登山」を開催。関連行事として、さんぱく夏期だいがく「一壜百験ー山のミニ科学実験教室ー」やさんぱくゼミナール「信州の教育者・地質学者　保科百助ー明治期を駆け抜けた唯一無二の奇才　五無斎にせまるー」を開催した。
１０月から企画展「雪が織りなす物語」を開催した。

○博物館で実施している調査研究事業について、市民に分かりやすく理解していただく機会として２日間にわたって「山のサイエンスカフェ in　さんぱく 2021」を本年度から開催。
人文と自然科学分野の合計６講座を開催した。

○９月２２日には、博物館に収蔵・保管されている絵画や登山道具、剥製などの展示をご覧いただく「バックヤード見学会　何があるのかな？博物館収蔵庫・図書資料館を見て回ろう！」を企画し、普段は公開されていない収蔵施設を多くの方々に見学いただく。

○本年度のニホンライチョウの繁殖は、１ツガイを自然繁殖させることに取り組んだ。有精卵を自然抱卵させることができたが、孵化には至らなかった。

市立大町山岳博物館 70 年の歩み

発　行　日　　令和 3（2021）年 11 月 28 日
発行・編集　　市立大町山岳博物館
〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL　0261-22-0211　FAX　0261-21-2133
URL:http//www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp